

廉思編 関根謙監訳『蟻族 高学歴ワーキングプアたちの群れ』勉誠出版 2010

2009年、中国では「蟻族」が社会問題となった。「蟻族」が問題とされるのは、彼、彼女らが描いていた理想の将来と、現実の社会との乖離から生じた不満が鬱積し、大規模な集団行動となって中国社会の秩序を揺るがす事態を招きかねないからだ。

元来中国では、「出稼ぎ農民、リストラ労働者、農民」の「三大弱者集団」の存在が問題視されてきた。しかし、著者らが2008年に実施した調査から、それまでエリート層ではなかった高学歴者層の中から新たな弱者グループが発見された。彼、彼女らは、日本でいう短大や専門学校、地方の国立大学や民間の四年制大学以上の高等教育を終えた20代から30代までの若者であり、よりよい就労機会を求めて北京や上海などの大都市周辺で「群居村」を形成して生活しているが、大半は居住する都市の戸籍を持たない。著者はこれらの若者を「蟻族」と名付けた。その理由は、蟻の特徴である「知能指数」が高く、「群棲動物」に属し、「甘く見ていると（蟻害のような）深刻な災害を引き起こすため『弱小な強者』と称されることがある」点が、彼、彼女らの特徴に類似しているためであるという。

「蟻族」の多くは、ウェブサイト管理やプログラマー、営業や販売、サービス、事務などの職に就きながらも、厳しい生活を送っている。彼、彼女らはきちんと就労を行っているにもかかわらず、なぜこのような状況に置かれているのか。中国の労働市場に関する研究<sup>1</sup>によれば、1970年代後半以降の「改革開放」政策による中国経済の飛躍的な発展のなかで、労働需要が量的・質的に変化し、これまで高学歴層が就いてきたホワイトカラー労働が「新技術の開発と企業経営の拡大のための研究職、経営管理職や企画職」と「事務職や営業職など比較的単純な作業を行う、一定の限られた責任権限を持った中級・一般の管理職」とに分離し、階層化が進んでいるという。「蟻族」の大半が就く仕事はこのうち後者すなわち下層の仕事であると考えられ、それを裏付けるように、彼、彼女らの平均月収は都市部の企業で働く労働者を下回る。さらに、その仕事の多くが有期雇用であり、3割が雇用先と正式な労働契約を結んでおらず、「三種の保険」（年金保険・医療保険・雇用保険）の保障もない（「蟻族」の労働契約締結率、社会保障加入率は都市部の企業で働く労働者のそれらをいずれも下回る）。

また、著者は「蟻族」がいくつかの要因によって発生したと考えている。その一つに、1980年代以降の「大学の大量化」があげられる。大量化、つまり、大学入学の間口が広がり、大卒者が増加したのである。しかし、大卒者の増加に大卒に対する求人増加のスピードが追いつかず、その一方で、高校や職業専門学校卒業生に対する需要が増加した。また、政府が先端的教育、すなわちエリート養成のための「重点校」として指定した名門大学を卒業した若者は就職において有利であるのに対し、蟻族の9割を占める地方や民間の高等教育機関の出身者は苦戦を強いられ、望むような仕事に就くことができずにいるのである。著者は、こうした実態を「大学を出ただけで何の特徴もない大量の大学生が、就職において中途半端な状況に立たされている」と指摘している。

「蟻族」の若者たちは、就職で厳しい状況にたたされ、社会にたいして不満をつのらせている。しかし、彼、彼女らは自らの将来を諦め、悲観的になっていないわけではない。厳しい社会の現実にも直面しながらも、上昇志向を持ち続け、次のチャンスに備え努力する。近年の中国社会の急速な発展をみれば、それがこうした若者たちに希望を持たせているとも考えられる。とはいえ、「蟻族」は今後も増加し続けることが予想され、状況を楽観視することはできない。本書では、「蟻族」に関する今後の政策的対応が明確に示されていないわけではないが、成長が限界に達し、彼、彼女らの希望が失われたとき、中国はどのような対応ができるのか。“一生懸命働いてもむくわれない”と若者が感じたとき、中国における「蟻族」はより深刻な社会問題となるのではないだろうか。

（仲塚 周子）

1. 李輝 2007「中国における『地域別労働市場』の形成」、『立命館経済学』（第55巻・第5・6号）を参照した。